



令和6年度 加古川市青少年海外派遣 報告書



公益財団法人 加古川市国際交流協会
Kakogawa International Association



AUCKLAND

公益財団法人 加古川市国際交流協会
〒675-0065 兵庫県加古川市加古川町篠原町21-8
TEL:079-425-1166
FAX:079-425-0200

目次

加古川市の姉妹都市 01

中学生海外派遣

中学生海外派遣 研修概要 02

派遣研修10日間の記録 04

団員レポート 06

青年海外派遣

青年海外派遣 研修概要 28

派遣研修11日間の記録 30

団員レポート 32

加古川市の姉妹都市

ニュージーランド・オークランド市

オークランド市は北島の北部に位置し、ニュージーランド最大の都市です。民族構成はマオリ族を始め多岐にわたり、多様性に富んだ文化が育まれています。マタカウ湾とワイタケレ湾の間に位置するオークランド市では、点在する島々、海岸、森林保護地などの自然が豊かに息づいており、誰もが気軽にレジャーを楽しむことのできる環境が整っています。

加古川市は、1992年にワイタケレ市と姉妹都市提携しました。その後、ワイタケレ市は2010年にオークランド市をはじめとする周辺の市町と合併し、現在のオークランド市となりました。これにより、加古川市とワイタケレ市の姉妹都市交流は、オークランド市との交流に引き継がれることとなりました。



加古川市が寄贈した平和の鐘



ブラジル・マリンガ市

マリンガ市は、ブラジル連邦共和国南部のパラナ州に属し、精密な都市計画に基づいて建設された新興都市です。原生林をそのまま残した自然公園（インガ公園）を街の中心に配し、縦横に走る道路には、すべて街路樹が植えられ、街全体が緑にあふれています。日系人が多いことでも知られ、政治、経済、文化等のあらゆる分野で日系人が活躍しています。

加古川市とマリンガ市は、1973年に姉妹都市提携を締結しました。市内には、加古川市との姉妹都市交流を記念して「加古川大通り」や日本庭園がつくられ、青年の相互派遣を始めとする各種団体の訪問など、親密な交流が行われています。



1973年の姉妹都市提携調印



中学生海外派遣

次代を担う青少年を姉妹都市「ニュージーランド・オークランド市」に派遣し、学校訪問やホームステイなどを通じて国際的視野を広げ、地域社会における国際協力の芽を育むことを目的とした、第31回加古川市中学生海外派遣事業を実施しました。

研修概要（事前研修～派遣研修～報告会）

（1）派遣生

10名

安芸 帆夏、池田 晴、上笠 カエラ、岸本 明莉、谷 彩花、
田淵 環太、岡井 梨葉、平山 煌己、藤原 陽菜、米田 実緒

（2）引率

新川 雅子(山手中学校教諭)、中嶋 由里、福山 美都

（3）事前研修

10名の派遣生は、訪問先の文化、習慣、言語などを調べ、学ぶことで、日本と違うところを発見して、相手を理解し、認めることの大切さを学びました。また、帰国後、自分自身ができる身近な国際交流を考える機会も持ちました。

6月30日	オリエンテーション
7月14日	先輩の体験談等
7月20日	訪問地研究発表、ニュージーランドの文化等
7月30日	多文化共生研修、英語研修

（4）結団式

8月3日に中学生海外派遣と青年海外派遣の合同で開催。市長や市議会議員から激励の言葉をいただき、派遣生代表が意気込みを力強く宣誓しました。国際ソロブチミスト加古川から現地で使用する記念品をいただきました。

（5）派遣研修

月 日	場 所	内 容
8月14日	加古川～伊丹空港 ～成田国際空港	
8月15日	オークランド	オークランド市内見学 ホストファミリープログラム
8月16日	オークランド	ワイタケレプライマリースクール訪問 授業体験
8月17日	オークランド	ホストファミリープログラム
8月18日	オークランド	ホストファミリープログラム
8月19日	オークランド	オークランドタウンホール・日本庭園訪問 オークランド博物館見学
8月20日	オークランド	ワイタケレプライマリースクール訪問 授業体験
8月21日	オークランド	ワイタケレプライマリースクール訪問 授業体験
8月22日	オークランド ～成田空港	
8月23日	羽田空港～伊丹空港 ～加古川	

（6）事後研修

9月7日に開催。現地での経験を振り返り、今後どのように活かせるかなど意見交換し、自分たちができる国際交流を考えました。

また、報告会の発表内容をグループ別に検討し、以後、自主的に集まり報告会の発表準備をしました。

（7）報告会

11月17日に中学生海外派遣と青年海外派遣の合同で開催。それぞれのグループ別に発表し、発表後、中学生と青年、国際交流協会役員で座談会を行い、海外派遣で感じたこと、経験を通じて自分ができる活躍の場などについて意見交換をしました。

派遣研修 10 日間の記録



学校訪問



オーグランド博物館

学校の図書室で



ホストデー



ホストデー



タウンホール訪問



日本庭園の平和の鐘



受け入れることの大切さ

安芸 帆夏

数回の事前研修を通して、この仲間となら安心だと思えるようになり、出発の日を待ちました。

オークランド国際空港に到着し、「私は外国人なんだ」と実感しました。聞こえてくる言葉、標識などにもかまが英語。ワクワクしながら日本を離れたけれど、自分の英語が通じるのか、聞き取れるのかなど少し不安になったことを覚えています。ニュージーランドで過ごした日々は全てが新鮮でしたが、特に印象に残ったことが3つあります。

1つ目はホストファミリーです。ホストファミリーは全員フレンドリーでとても優しくかったです。たくさん遊びに誘ってくれたり、ゆっくり簡単な英語

で話しかけてくれたりと優しさに包まれた生活でした。また、ホストファミリーとの1番の思い出は私の誕生日パーティーをしてくれたことです。ニュージーランドのケーキをサプライズで手作りして食べさせてくれたことがとても嬉しかったです。学校では、誕生日の本人がキャンディーを配るなど、日本とは一味違う誕生日を味わうことができました。

2つ目は、学校での体験授業です。学校ではパディと一緒に行動しました。パディや、他の生徒とモーニングティータイムやランチタイムにスポーツをしたことがとても楽しかったです。また、授業の中で「他に何かある?」と聞かれると、日本では黙り込む場合が多いのに、たくさんの生徒が手を挙げて自分の意見や考えを伝えていたことに衝撃を受けました。また、学校内では先生と生徒の距離はとても近く、その上、性別、国籍、障がいの有無などによる差別がなかったように思えました。だから、私たちも外国人という立場だったけれども、差別を感じるようなことはなく、とても過ごしやすいかったです。そして、授業では与えられたテーマに関して自分で考えたり意見を伝えたりする課題が多かった気がします。椅子に座って先生の話を聞くだけでなく、自分で考えたり、友だちと意見を出しあったりすることの大切さを学びました。日本でもこのような教育を受けることができればいいのになと感じました。



パン作り



誕生日パーティー

3つ目はマオリの文化です。マオリの伝統あるハカを学校とオークランド博物館、テレビで、合計3回見ることができました。特に、マオリではない人たちがハカを踊っていることに驚きました。そして、病院などにもマオリ語の案内があったり、国全体でマオリの文化を大切にしようとしていることがすごく伝わってきました。日本でも、アイヌの文化や、古くから受け継がれている日本の伝統文化をもっと大切に守っていくべきだと思います。

この派遣事業を通して、私が感じたことは、「受け入れることの大切さ」です。私は、ニュージーランドでは「外国人」でしたが、街中やホストファミリーの家で普通に過ごすことができました。また、学校でも誰一人嫌な顔をせず、普通に接してくれました。だから今度は私が日本で、たくさんの人を受け入れようと思います。否定するのではなく、いろいろな考え、いろいろな人を受け入れられるような人になりたいです。そして私にとって、外国人の方々と関わることはとても有意義でした。だからこそ、今後は積

極的に加古川市などの国際交流事業に参加しようと思います。私が現地でたくさんの人に支えてもらった分、日本で生活している外国人が少しでも暮らしやすくなるよう、貢献していきたいです。また、自分が「外国人」という立場になって感じたことは、普通に接してくれる嬉しさです。特別扱いされるわけでもなく、スーパーの店員さんたちはカタコトの日本語でフレンドリーに喋りかけてくれたりと、普通に仲良くしてくれたことが嬉しかったです。日本もこのようなことがあたりまえのことと思える国にできるよう、温かく外国人に接していきたいです。そのために、これからも英語や、文化の学習にもっと意欲的に取り組んでいこうと思います。



一生の思い出

池田 晴

学校でホストファミリーを持つ間、どんな人が来るのか、何を話そうか、ワクワクと不安でいっぱいでした。いざ会ってみると、みんな明るい笑顔と声で迎えてくれ、ホッとほっとした気持ちになりました。

シスターのゾーイは、卓球やボードゲームでいつも私たちを笑わせてくれました。ブラザーのブレイクは、毎晩私をテレビゲームに誘ってくれて遊び方を教えてくれました。マザーは、私たちがしたいことを聞いてくれて計画を立ててくれました。ホストデーには色々な場所に連れて行ってくれました。ファザーは毎晩食事を作ってくれました。中でも、「日曜日に焼いた肉を食べる」イベントである、サンデー

ローロストの目に作ってくれたローロストラムには驚きました。私は元々麻がきつい羊肉は苦手でしたが、せっかく出してくれるのだからと、挑戦する気持ちで食べました。すると全然臭みがなくジューシーで、生まれて初めて「羊肉っておいしい!」と感じました。

ホストファミリーはみんな温かい人たちで、日を過ごすことに緊張もはぐれ、一緒にだんらんする時間を楽しく過ごすことができました。そんなファミリーとの一番の思い出は、みんなでビーチへ行ったことです。同じ犬のデルタと一緒に、家から少し離れたマオリ・ベイというビーチへ行きました。マオリ・ベイは砂が黒く、日本の浜辺の何倍も広く、波が高く映画に出てきそうな幻想的な世界でした。走ったり、貝を拾ったり、とても楽しいひとときでした。マザーが集合写真を撮ってくれて、本当の家族のように感じました。一生の思い出に残る時間でした。

私がニュージーランドで感じたことの中で一番大切だと思うのは、失敗を恐れずに行動すること、言葉が出なくても、伝えたい気持ちと聞きたい気持ちがあれば、人は通じ合えるということです。

派遣に行くまでは、文法が間違っていたらどうしよう、単語が出てこなかったらどうしよう、とそればかり気にしていました。そして、ニュージーランドに来てみると、やはり会話がとても速くて、話の内容を聞き取るのが精一杯でした。自分からはなかなか言葉が出ず、緊張で返事をする



ホストファミリーと

のがやっとでした。

しかし、何とか今の気持ちや状況を伝えようと、知っている単語や短い文章を駆使し、足りない部分はジェスチャーで伝えました。英語は十分に話せていなかったけど、日に日に会話も弾むようになり、自信と嬉しさを感じました。「正しい言葉を使えなくても、気持ちが通じ合えばいい。みんなで楽しむことができるんだ。」ということが分かり、「言葉」で悩んでいたことはとても小さいことだったと気付きました。

私は、ニュージーランドに派遣されたことを学校で友達に話しました。すると、たくさんの友達が「私も応募しようか迷った!」とってくれました。しかし、みんな自分の英語力に自信が無いから、という理由で応募を断念していました。私は、国を越えるには言葉を知っていないといけない、と思っている人がたくさんいることに気が付き、もったいないと感じました。確かに言葉は大切ですが、私はニュージーランドで、言葉だけが全てではないことを学びました。一人でも多くの人に、コミュニケーションをとるのが一番大切なことは、伝えたい気持ちだということ、重要なのは言

葉だけではなくということを知ってもらいたいと思いました。そのために私は、外国に興味がある友だちに、現地で経験や学んだことを伝え、外国へ行くことの本当の楽しさを伝えていこうと思いました。

今回の派遣で、私はニュージーランドに降り立ち、「外国人」の立場を知りました。はじめは、見知らぬ土地に驚いたり、言語の壁にぶつかり、不安になったりしました。しかし、現地の人は言葉の分からない私に親切に接し、理解しやすいように工夫しながら話してくれました。そのおかげで、私は、ニュージーランドで皆さんと楽しく過ごすことが出来ました。だから、これから私は、ニュージーランドの人たちがしてくれた対応を、日本に来た外国人の人にもすることで、恩返しをしたいと思います。不安ばかりで動けなかった私と同じ気持ちになっている人が安心して過ごせるように、相手の表情を読み取り、積極的に話しかけることでサポートしていきたいと思いました。



パディのタティアナと



ニュージーランドでの 10日間

上 壁 カエラ

ニュージーランド派遣が決まってから、嬉しさとコミュニケーションがしっかりとれるか不安でいっぱいでしたが、少しずつみんなと仲を深めることができ、不安な気持ちより楽しい気持ちで臨めました。

今回のニュージーランド派遣では、色々なことを経験できました。ニュージーランドで印象に残ったことは3つあります。

1つ目は、ホストファミリーです。はじめはしっかりコミュニケーションが取れるか、ホストファミリーと馴染めるか不安だったけれども、とても温かく受け入れてもらいました。何を話せばいいかわからなかった時もいろいろな質問をしてくれて嬉しかったです。また日本で習っている英語とは違い、



ホストシスターとホストブラザー

スピードが違ったり、言っていることがわからなかったときに、ホストマザーやファザーだけでなくホストシスターたちが伝わるまで教えてくれました。積極的にコミュニケーションを取ろうとしたり、相手に伝わらなくても伝えようとする気持ちが大切だなと思いました。

2つ目は、学校訪問です。学校にはいろいろな国の文化を持つ人たちがいて、それが当たり前になっていました。日本だと学校に外国人がいても数人です。しかし、学校訪問ではみんながみんな尊重し合っていて、困っていたら気さくに話しかけてくれ、すぐに助けられました。また、日本では発表のときにあまり手を挙げない印象があったのですが、私たちが行った学校では、多くの生徒が手を挙げていて、それぞれの意見を発表していました。自分の意見を相手にしっかり伝える事はすごく大切だと思いました。日本では、自分の意見を主張したり、困っている人がいても助けることをためらったり、戸惑ってしまうことが多いけれど、自分の思っていることは伝えないと伝わらないし、誰かのために行動するということはすごく大切なことだと思ったので、私もそのように行動ができるようになりたいです。

3つ目は、マオリ文化です。ハカを



学校とオークランド博物館で見ました。ハカとは戦いの前の心構えの儀式として、民族同士の団結力や士気を高める民族舞踊です。特に学校でハカを見たときに、生徒みんなが自分たちの文化を堂々と見せてくれて、すごく迫力を感じたことが印象的でした。それぞれの文化に誇りを持ち、その文化を守り、相手に伝え、後世に受け継いで行くことが大切なんだと思います。だから私も、日本の文化をもっと知り、受け継いでいけるようにしようと思います。

今回の派遣を通して学んだ事は、初めて挑戦することには不安があるかもしれないけれど、挑戦していくことの大切さ、そして相手の文化を尊重するということです。最初は、コミュニケーションがしっかりとれるか不安だったけれども、諦めずに話そうとしたり、相手が言っていることを理解しようと努力することで、通じ合えることができました。そして、それぞれの文化を尊重することで生きやすくなるということ

もわかりました。それはニュージーランドでみんなに心優しく受け入れてもらえたからこそ、感じることができました。ニュージーランドでの10日間はとてもあっという間でした。しかしこの10日間で、日本との違いを見つけるだけでなく、人に思いやりを持って行動する大切さを改めて実感しました。

最後に、このような貴重な経験を自分だけで終わらすのではなく、たくさんの人たちに発信していきます。そして、日本だけでなく、どんどん視野を広げる国際交流をしていきたいです。



国を越えた友情の輪

岸本 明莉

「5年後にまた必ず来るね。」ホームステイ最後の夜、ホストファミリーと約束をしました。別れるのが悲しくて泣いてしまいました。このままずっと過ごしたいと思うくらい、ニュージーランドは魅力にあふれた国でした。私にとって初めての海外は充実したもので、一生の思い出となりました。

私の英語が伝わるのかという不安と、楽しみな気持ちを抱えながら出発の日を迎えました。オークランド国際空港に降り立った瞬間、心地の良い風を感じました。不安な気持ちは一気に吹き飛び、どんなことが私を待っているのだろうと期待に胸が高まりました。

私のホストファミリーは、60代のご夫婦と猫です。初めは話していることが通じて聞き取れないことがありま

した。私が苦労したのは「Monday」の発音です。ニュージーランド人は、オーストラリア英語に近いアクセントを持っているため、「マンダイ」と発音していました。このように、全体的に独特の訛りがあり、戸惑いましたが、不思議に段々と理解できるようになりました。

ホームステイ中、日本料理を振る舞いたくしてお好み焼きを作りました。マザーに「キャベツパンケーキ」だね、と気に入ってもらえて食事中的会話も弾みました。

2日間のホストデーでは水族館、ボウリング場、教会、モールなど、たくさんの場所に連れて行ってもらいオークランドを肌で感じて学ぶことができました。ボウリングは仲の良いファミリーが大勢集まりました。私自身ボウリングをするのは2回目ですが上手いありませんが、奇跡的にスベアを取った時には、みんなと一緒に喜んでくれて嬉しかったです。初対面でも優しい方々に恵まれて幸せだと感じました。

学校での授業体験では、バディのミカエラと一緒に過ごしました。日本の学校との違いは、ランチの前にモーニングティータイムというお弁当の一部を食べる時間があることです。お弁当に丸ごとのりんごやスナック菓子も入っていました。



ワイタケレの元市長さんたちと



大好きなホストファミリー

放課後にファザーがお気に入りのビーチに連れて行ってくれました。この海は、日本と繋がっているのだなと考えたら不思議な気持ちになりました。洞窟もあり、自然を満喫できました。

今回の派遣を通して学んだことは、3つあります。

1つ目は、人の心の温かさです。オークランドで出会ったホストファミリー、日本の両親、友だち、先生など多くの人に支えられて、今の私があるのだと改めて思いました。毎晩ホストマザーがおやすみのハグをしてくれました。その他にも初めて会った人とハグをするので、仲良くなれました。また、メールを交換して交流の輪が更に広がりました。

2つ目は、伝えたい気持ちを大切にすることです。上手く英語が話せなくても、伝えようとする気持ちがあると伝わります。また、私の話していることを親身になって聞いてくれ、理解しようとしてくれたホス

トファミリーに心から感謝しています。

3つ目は、常日頃から感謝の気持ちを伝えることです。ホストファザーが、いつもホストマザーにありがとうと自然体で伝えていたことが驚きでした。私もこれから意識して感謝の気持ちを伝えようと思いました。

この派遣事業を通して私自身大きく成長できました。ニュージーランドで受けた優しさや嬉しかった思いを、地元加古川に住む外国人の方へこれから繋げていきたいと思えます。私が最初感じたように、異国の地では不安がつきものです。目が合ったら笑顔であいさつを返してもらっただけで不安は和らぎます。言葉の壁があってもお互いを分かり合いたい気持ちがあれば通じ合えると確信しました。将来は海外との懸け橋になる仕事に就くという新たな目標ができました。夢に向かって進んでいきます。



ニュージーランドで 感じた人の温かさ

谷 彩花

私は最初自分の英語が通じるか、うまく馴染めるかなどたくさんの不安がありました。最初は帰りたくないと思うほど充実したかけがえのない日々を過ごしました。

いよいよ待ちに待った出発の日、家族や先生などたくさんの人に見送られながら、私たちは期待と不安を胸に日本を飛びました。10時間のフライトは、私にとって初めてで疲れもありましたが、オークランド国際空港に着いた途端、疲れが吹き飛びました。日本とは違う冷たい空気や外国語が耳に飛び込んできて何もかもが新鮮でした。そんなニュージーランド生活の中で印象に残っていることは3つあります。

1つ目はホームステイです。最初は自分の英語が通じるか、うまく馴染めるか不安を感じていました。しかしホストマザーが明るく迎えてくれて、自

分が伝えられることを嬉しく思えました。2日目、出張から帰ってきたホストファザーとあいさつをしました。ホストファザーは日本が大好きで、自己紹介も日本語でしてくれました。折り紙もすごく喜んでくれて嬉しかったです。ホームステイが一番思い出に残っているのはホストデーです。ビーチやシスターがボランティアをしている動物園、ショッピングに行きましたが、動物園のスタッフの方はとてもフレンドリーで色々な種類の動物を触らせてくれました。近所に出かけるだけでもたくさんの人種の方と出会い、改めて多国籍な国なのだと実感しました。家ではホストシスターが「何のゲームがしたい?」と聞いてくれ、神経衰弱をして最高の思い出ができました。ホストファミリーとの別れの日、「この家に来てくれてありがとう」と言われて、ああこの家に来てよかったと心からそう思いました。

2つ目は学校訪問です。初日の歓迎会のハカは、とても迫力があり圧倒されました。学校の雰囲気はとても自由で日本とは全く違っていました。生徒のみんなが自然に話しかけてくれたのですぐに馴染むことができました。モーニングティータイムやランチタイムの他に、つまみ食いタイムがあったりして驚きました。休憩時間はネットボールのルールを丁寧に教えてくれてとても楽しかったです。また、男の子と一緒に手をつないで学校を一緒に回り



ました。日本人は消極的で知らない人にはあまり話しかけないので、自然と「近頃!」と言ってくれて嬉しかったです。小さい子でも外国人に積極的に話しかけてくれるのは、街のウェルカムな雰囲気があるからかなと思いました。本当にフレンドリーで、困っていると声をかけてくれたので不安を感じることなく楽しい時間を過ごすことができました。

3つ目はオークランド博物館です。マオリ民族のことを知っていても、実際に触れることはなかったので感動しました。特に心に残ったのは展示されていたマオリの集会所とハカです。集会所の壁一面には彫刻が施されていて、その一つ一つに意味があると知りました。また、ハカはとても力強く、とにかく迫力がありました。マオリの人は文字が無かったため、物語や彫刻、歌、踊りで歴史を伝えていたと聞き、だからこそこれからも大切にしなければならぬ文化なのだと思います。

私は、この10日間のニュージーランド生活で言葉をうまく話せなくても、伝えよ

うとする気持ちが人と人をつなげると感じました。話せないからといって殻に閉じこもってしまうのではなく、積極的にコミュニケーションをとることで相手との距離が縮まると思います。また、ニュージーランドの人たちは「ありがとう」とたくさん言っていました。感謝の言葉を素直に伝えるのは簡単なようで難しいことだと思います。「ありがとう」はお互い温かくなる言葉だと思うので、私もこれからたくさんの人に伝えていきたいです。

そして、文化も大切にしていきたいです。ニュージーランドでは、学校でマオリ語の授業があったりハカを踊ったり国の文化がいつも身近にあります。自分の国の文化を好きで、大切にしていることを知り、素敵だと思いました。日本ではあまり昔からの文化と触れることはありません。なので、もっとたくさんの人に日本の文化、外国の文化を知ってもらえるように発信していきたいです。さらに、文化を通じて日本人と外国人の架け橋になれるような存在になりたいと思っています。



学校のダンスタイム



何もかもが新鮮だった 10日間

田淵 環太

ニュージーランドに着いて初めて発した言葉は「寒っ」。それだけ気候が大きく違う。遠い地に来たことを実感しました。同時に言葉を理解することはできるのだろうか、馴染めるのだろうか、などといった不安も湧きました。ホストファミリーと初めて出会った時の雰囲気や親切さが、そのような不安を忘れさせてくれました。

オークランドは街のすぐ近くに自然があり、都会なのに落ち着きがあり、私にとってとても居心地のよい場所でした。バスの中でオークランドの街を眺めていると、ヨーロッパ風の建物や漢字、様々な国籍の飲食店があり、文化の違いというより、文化の多さを感じました。そしてニュージーランドといえばマオリ。街中ではマオリ語の

案内があったり、学校でハカを披露してくれたりなど、現地の人たちはマオリの伝統を大事にしているのだと思いました。

家に着いた後、ホストブラザーのメイソンが「外に行こう」と誘ってくれ、家の設備を紹介してくれたり、一緒に遊んだりしました。日本にいる間は、日常的に外国人と英語で話すことがほとんどなかったので、せっかくのこの機会になるべく何かを話そうと思い、自分の感情を共有したり、様々な質問をしたりなどして、とにかく積極的にコミュニケーションを多く取ろうとしました。そうするとメイソンと仲良くなれて、他のファミリーとも躊躇せず話しかけられるようになり、最後まで楽しく過ごすことができました。ニュージーランドの人々はみんなフレンドリーでした。初めて会った人でも、よく話しかけてくれたり、何かに話してくれたりと非常に親しみやすかったです。

ホストファミリーとはよく折り紙をしました。ニュージーランドでは折り紙は人気だそうです。私が日本からのお土産として折り紙を渡すと、ホストファミリーは夢中になって遊んでいて、自分の国の文化が外国で親しまれていることにすごく嬉しくなりました。様々な種類の折り紙で遊んだり、教え



トランポリン

たり教えられたりするのが楽しく、私が折っていると「それ何?」と聞かれて会話が弾んだのも嬉しかったです。

この海外派遣では3日間学校に行きました。最初にマオリのハカを披露してくれ、あまりの迫力に終始圧倒されました。授業となると英語が急に難しくなって、ついていくのが精一杯でした。授業の様子とは大きく異なり、基本的に自由でのびのびしているように感じ、みんな積極的に発表をしていて授業に活気があるように感じました。授業の他にも、日本にはない活動が多くあり、常に新鮮な気持ちでいられた場所でした。

私は外国人としての立場でニュージーランドに行きました。でも実際には普段と変わらず現地の日常に溶け込んでいたように思います。何か特別にされていると感じることもなく、何の障りもありませんでした。思い返せば、ニュージーランドで会った人たちは誰に対してもフレンドリーに接

し、また互いの文化を大切にしている、これらがニュージーランドで多文化が共生している理由なのかなとも思いました。そして、思った以上に言葉の壁は高くありませんでした。私はあまり英語を上手く話せませんでしたが、一生懸命に伝えようとすると、相手も一生懸命聞いてくれます。現地の学校で、生徒たちがまったく馴染みのない私たちをすぐ輪に入れてくれて、心が軽くなったように、今後外国人が増えていくであろうこの日本で、外国からきた人が不安にならないためにも、お互いに柔和に過ごしていくためにも、排他的になるのではなく、誰にでも分け隔てなくフレンドリーに、そして積極的に接して輪に入れることが大切だと気づくことができました。だからこれから私は、ニュージーランドの人のように、誰にでも分け隔てなくフレンドリーに接していきたいと思いました。



図書室での授業



夢の国

筒井 梨葉

今思えば、ニュージーランドでの生活はまるで夢のようでした。

暑い日本からニュージーランドまでの約10時間のフライトは永遠と感じるほど長く、辛かったです。オークランドに着き、空港の外に出てみると、寒い。とても寒かったです。そして、どこに行っても自分の言葉が全く通じずショックを受けました。

初めて学校を訪問した時の印象は、何かのドラマの舞台みたいに感じました。学校でのオリエンテーションの後、ホストファミリーが温かく出迎えてくれ、身構えていた気持ちがほぐれました。ホストマザーは気さくに声をかけてくれ、ゆっくり話してくれたので安心しました。ホストファザーは話すスピードが速く、ジョークも多くて、リスニングテストみたいで少し焦りました。



学校の授業で

た。出会った当初、ホストファザーは早口で、サングラスをかけていたので怖い人だと勝手に思っていました。今振り返ると遠くから来た中学生を彼なりに安心させようとジョークやジェスチャーで表現してくれていたのだと思いますが、当時は余裕がなくて誤解していました。このことから、人を見た目で判断してはいけないと反省しました。

学校ではバディのペラが待っていました。バディは優しくいろいろと話しかけてくれたので安心して学校生活を送れました。長い休み時間にはバディ以外の友だちとも遊ぶことができて楽しかったです。授業は全て英語でしたが、現地の友だちに積極的に聞いたら何とか理解することができました。日本語の歌を取ってくれた生徒にその英訳を教えるとすごく喜んでくれました。自分から聞かないと生まれない絆がありました。このことから、優しさを待っているだけではなく、積極的に交流するともっと充実感が味わえることを学びました。

休日はホストファザーの車で海に行きました。初めてのタスマン海ではしゃいでいたら、雨が降ってきました。急いで暗い洞窟に入りました。せっかくの海をあまり見ることができず落ち込んでいたら、ホストファザーに「雨



ホストファミリーと

でびしょびしょでも寒くても笑顔を失わないで」と言われました。きっと表情が暗く、楽しくなさそうだったのでしょう。今でも疲れてしまって笑顔を失いそうな時にこの言葉を心の中で唱えます。ニュージーランドで教わったことは日本でも役立っています。

ホストファミリーがクリスチャンだったので、キリスト教独自の文化を教えてくださいました。夕食時にお祈りをするのが、日本の『いただきます』のようで既視感がありました。中でも一番感動したのが教会です。始めは堅い印象があって、行くのに気乗りがしませんでした。いざ行くと想像以上に温かい空間で驚きました。歌っている最中、歌詞がわからないときにいろいろな人が発音の仕方を教えてくれました。自分が反対の立場だったら、正直そこまで親切にできなかったと思います。違う文化圏の人とも気さくに聞かれるキウイ（ニュージーランド人）に感化されて、今では見知

らぬ人にも親切に接することができるようになりました。

この10日間、様々な人との出会いと別れがありましたが、たくさん心に残るものがありました。これっきりで終わらせるのではなく、現地の人と連絡を取り続けたり、困っている外国の方を助けたりして終わらせないことが大事だと思います。見るものすべてに感動したオークランド。もう一度行きたい、もっと仲良くしたい、もっとお互いを理解して語め合いたいと自分はそう思います。その日が来るまでは日本でも困っていそうな人がいたら無視せず積極的に話しかけてみたり、通りすがりの人に笑顔で挨拶したりしようと思います。また、外国人だから、弱い立場だから助けてあげるというのではなく、困っているから、話してみたいから聞けるという姿勢が大事だと学びました。初めから大きなことをするのは難しいので、まずはクラスで1人だけいる人などに話しかけています！



肌で感じたNZの文化

平山 煌己

私は、この海外派遣事業に参加して、色々な経験をさせていただきました。

まず、私がニュージーランドでのホームステイで感じたことは、「なんとなくになった」ということです。はじめは、どのようにホストファミリーとコミュニケーションを取れば良いのか、現地で困ることはいくつか。不安な気持ちで迎えたニュージーランド生活でした。しかし、ホストファミリーの皆さんや学校でできた友だちと打ち解けてくると、だんだんと不安な気持ちはなくなり、嬉しい、楽しい、もっと聞きたい、といったポジティブな思考に変わっていきました。



4歳のホストブラザーと

私がお世話になったホストファミリーは、昨年もこの派遣団の中学生を2人受け入れたそうで、「この子知ってる？」と写真を見せてくれました。昨年の派遣生を受け入れ、日本の文化に興味を持ち、今年も私たちを受け入れてくれたそうです。4人の幼い子供たちと仲良くなれるか不安でしたが、11歳のメイソンは初日から一緒にバスケットをしてくれたり、トランポリンで遊んでくれたりしました。7歳のエミリーと9歳のハーバーは晩ご飯が終わると、一緒に折り紙をしてくれました。4歳のリアムは最初は恥ずかしかったようで、話しかけてもモジモジしていましたが、打ち解けてくると、何故か私のことを「こうき」ではなく「クッキー」と呼びしてきたことが面白かったです。

また、英語が通じるか不安でしたが、3日目くらいになってくると、「うん、はい」ではなく、自然に「OK, yeah.」という英語が口から出てくるなどと、だんだん現地の言葉に慣れていきました。自分の発音で言葉が通じるかととても心配していましたが、伝えようとする気持ちさえあれば、伝えたい内容は伝わりました。文法など気にせず積極的に話しかけたり、単語を並べたり



仲良くなった学校の友達

するだけでも、とても有効だということがわかりました。

帰国後、日本の空港で、外国人に英語で話しかけられた時に、日本語ではなく英語で返した自分に一番驚きました。

このように、不安な気持ちで挑んだことでも、自分が「伝えたい、チャレンジしたい」という気持ちさえ持っていれば、なんかなるということがわかりました。このことを踏まえ、今よりさらに積極的に何にでもチャレンジし続けていきたいと思っています。

ニュージーランドでは、家は土足、ペット飼育率が高いなど、日本では経験できない文化がありました。そしてニュージーランドの先住民、マオリの文化とも触れることができました。生命や人を大切に、尊重するというとても素晴らしい文化だと感じました。これから、その素晴らしいと感じた文化を周りの人に伝えたいです。そ

うすること、異文化に興味を持つ人が増えたらいいと思います。そして、異文化と触れ、理解することで、互いの文化を尊重し、国際交流が活発になるきっかけになるのではないかと思います。

私たちはニュージーランドでは外国人で、少数派の立場として生活しました。ですが、ニュージーランドの方々は、積極的に話しかけてくれたり、英語がわからなかったら簡単な単語でゆっくり話してくれるなど、外国人である私たちにとっても優しく接してくれ、良い街だなと感じました。私がそう感じたように、加古川に住んでいる外国人の方に、少しでも住みやすい街だと思ってもらえたら嬉しいです。そのために、困っている外国人の方に話しかけてみるなど、私も小さなことから実践していけたらと思います。



成長した自分

藤原 陽菜

私はこの海外派遣でたくさんのことを学び、そして成長したと感じました。10日間を通して特に成長したことが3つあります。

1つ目は人に積極的に話しかけるということです。私は、同じ学校の人や近所の人など元々知っている人には積極的に話しかけることができましたが、今回は会う人全てが知らない人ばかりでとても不安でいっぱいでした。事前研修でも、最初の方は緊張していて普段の自分が出せなかったのですが、研修を重ねる間に積極的に意見を言えるようになりました。派遣中も、空港で外国人の方やほかの団体の人たちに



バディとの楽しい食事

話しかけて、仲良くなり、写真まで撮ってもらえるようになりました。ニュージーランドではホストファミリーがとても愉快な人で話やすく、わからないことや、気になったことを質問すると、笑顔で答えてくれてとても嬉しかったです。シスターやブラザーとも仲良くなって毎日遊んでいました。私が話しかけることによって、たくさんの人と仲良くて、毎日勇気をだして話してみても良かったなと思いました。

2つ目は、日本と違うところをたくさん見つけるということです。ニュージーランドには日本と違うところがたくさんありました。例えば歩行者用信号機です。日本の歩行者用信号機は赤で止まり、青で渡るという仕組みですがニュージーランドは少し違います。赤や青は同じなのですが、青色になって渡る時に、赤になるまでの時間をカウントダウンしていました。私はこれを日本に取り入れてもらえれば交通事故も減りそうだなと思いました。そのほか、青色の歩くマークが本当に動いていて、歩くタイミングがわかりやすかったです。

3つ目は、外国人との話し方です。私は出発前、外国の人と話す時、英語が話せなかったら、絶対相手に伝わら



ないと思っていました。しかし、ワイタケレスクールでバディやほかの生徒たちと会話する手段が英語だけではないということに気づき始めました。例えば、先生の会話が聞き取れず、今何をしたらいいのかわからないことをジェスチャーで相手に伝えてみました。すると、私が困っていることが相手に伝わって、今何をすればいいのか教えてもらえました。その他にも英文がわからない時には、自分の知っている英単語を使ってみたり、バディも時には私のために英語を話すスピードを遅くしてくれ、聞き取りやすくしてくれたりもしました。自分の気持ちや言葉が伝わった時にはとても嬉しく、最終日にはバディと話が盛り上がるまでジェスチャーを使いながら自分なりに話せました。

私は本当にこの研修に参加することができて良かったです。たくさんの方の支えがあ

ってこの研修に行けたことに本当に感謝しています。また、このメンバーで行くことができて本当に楽しかったです。一生のうちに絶対に経験できないことをたくさん経験し、感じることができました。私は今後自分がニュージーランドで学んだことをたくさんの人に伝えていきたいと思っています。帰国後、学校の集会で発表の場をいただき、全校生に伝えることができました。ニュージーランドの生活や文化に興味を持ってくれる友だちもいて本当に伝えて良かったと思っています。これからもニュージーランドで学んだことを多くの人に伝えていき、自分でもこれからの生活に活かしていきます。



NZの思い出

米田 実緒

私がニュージーランドに行って感じたこと、思ったことは3つあります。

1つ目は、ホストファミリーとの生活です。私のホストファミリーは、マザーは家でハンドメイドの宝石を作っており、ファザーは出張でない日は在宅で仕事をしていました。家族の時間をとても大切にしていました。ホストファミリーとの生活の中で一番楽しかったのは、ディナーが終わったあと、家族で今日あったことを話しながら遊ぶ時間です。ホストファザーがものすごく神経衰弱が上手くて、シスターがすねてしまったり、オールブラックスの試合を見ながらみんなでくつろぐ時



ホストファミリーと撮影!

間がとても幸せだと思いました。また家事の分担が日本と違って、日本ではお母さんが家事をする家庭がほとんどですが、ニュージーランドでは少し違っているようで、ホストシスターもホストファザーも、仕事や学校が終わるとすぐに家事の手伝いをして、みんなでご飯を作っていました。その中で1日の出来事を話したりして、自分のできることをする、助け合う家族の形がとても素敵でした。

2つ目は、ニュージーランドの自然についてです。日本との決定的な違いは羊や牛、鶏などが放牧されているところだと思います。私が通っていたワイタケレプライマリースクールは、すぐ裏に丘があり、学校から羊が放牧されているのが見えました。またどこにいても周りをみると丘があり、とてもきれいでした。ニュージーランドでは冬に雨が多く、その分1日に何回も虹を見ることができ、とてもお気に入りの季節でした。

3つ目はプライマリースクールでの生活です。日本でいうと小学生から中学1、2年生の子どもたちが通っていて、私が感じた日本との一番の違いは、授業の自由さと体を動かす活動の多さです。授業ではそれぞれの決まった席は



ワイタケレプライマリースクールの校長先生と

なく、大小様々な大きさ、形の机と椅子があり、みんな好きなどで勉強をしていました。また授業の他に、ブレイクタイム、お昼休み、ダンスタイムなどがあり、運動を重視していました。様々な人種の子どもたちがおり、それぞれの文化を尊重していて、小さい頃から多文化とふれあうというのはとても重要なのだなと思いました。お別れのときクラスのみんながパーティをしてくれて、バディがハグしてくれたことがとても印象に残っています。たった数日の学校生活でしたが、帰りたくないと思うほど貴重な経験でした。

私が今回の海外派遣で学んだことは、多様性社会、自然と人間の共生、そして自分から話すことの大切さです。ニュージーランドの方々が、いかにマオリの文化を大切に守ってきたのか身にしみて感じたことを通して私も他の文化をもつ方に対しての目

線が変わったり、自分はこんなに英語を話せたのか、といった、自分の新しい一面に出会うことができました。

そして日本に帰ってきたあと、私は自分の経験を通して何ができるのだろう、と考えてみました。私がニュージーランドにいたときのことを思い出すと、楽しかった反面、自分が「外国人」の割であるという事実がなんとなく不安でした。そこで、例えば海外の方の日本語学習を手伝うボランティアであったり、日常でも困っている海外の方に積極的に話しかけてみるなど、たくさんできることが浮かび上がってきました。

楽しかったとともに、日本に帰ってからの自分自身の課題を見つけることが多かった10日間でした。帰ってきてからも勉強、コミュニケーション能力をつけるため頑張っていきます。



"Experience is the best teacher"

山手中学校教諭 新川 雅子

『経験は最高の師』—今回のオークランド市での様々な体験は、まさにこの言葉に凝縮されていたように思います。休日や休暇は即活動指導。また数年前のコロナ禍の影響もあり、私自身、海外に行くことが久しぶりでしたので、派遣生と同じように緊張感と高揚感を持って日本を出発しました。ニュージーランドについてはインターネットや本から得た情報や、事前研修で調べたことなど、知識としては知っていたものの、やはり実際に現地に赴き、そこに住む人々と言葉を交わし、関わりを持ち、自然や文化・歴史、人々の優しさを肌で感じることは、多文化共生を理解する上で大きな経験になりました。



学校での歓迎会

ニュージーランドでは先住民のマオリを始め、いろいろな民族の文化が尊重されています。図書館、博物館、教室の掲示物に至るまで、マオリ語と英語の並記が多く見られ、マオリ文化を伝承していく意識が強く感じられました。街には日本食を始め多国籍な店が立ち並び、買い物に出かければ店員さんが気さくに声をかけてくれるなど、「外国人」としての疎外感を感じることは全くありませんでした。多くの移民を受け入れてきたニュージーランドならではの多様性と寛大さなのだと感じました。

また、日本庭園やタウンホール訪問では、職員や議員の方々と一緒に鐘をついたり、2市のつながりについて説明していただいたり、派遣生たちへの積極的なアプローチとともに質問にも丁寧に答えていただきました。海外派遣事業はコロナ禍で一度途切れたと聞いていますが、互いの国や文化について知りたい、知ってもらいたいという思いと、これまでの良好な関わりが築き上げてきた強い絆を感じる事ができました。

派遣生は3日間、ワイタケレブライマリースクールで現地の生徒たちと交流を深めました。学校体験初日はマオリの伝統的な踊りのハカで歓迎を受け、派遣生は練習を重ねたソーラン節を披露



日本庭園にて

露しました。お互いの国の伝統文化を真剣に見る眼差しや生徒一人一人が順に握手しながら笑顔で挨拶を交わす姿に、相手を尊重する意識や姿勢を感じ、温かい気持ちになりました。学校は開放的で、ティータイム等もあわせて時間のゆとりもあり、さらに先生方や生徒たちもみな明るく、派遣生たちも楽しんで学校生活を送っていました。授業や会話は全て英語で進むため、派遣生は理解しようと苦戦する場面もありましたが、パディに質問したり、真剣に説明を聞いたり、ジェスチャーや既習の単語・文法を使って一生懸命に取り組み姿が微笑ましく、そのひたむきさや積極性が頼もしく感じられました。自分の英語や思いが伝わったときの嬉しさはもちろん、たとえつたない英語でも、伝えようとする気持ちと理解しようとする態度があれば、国境を超えてわかり合えることも多くあると派遣生は実感できたはずです。

ニュージーランドでの日本語学習者は減少していると聞きました。それでも私たち

を温かく受け入れ、友だちや家族のように接してくれたオークランドの方々から、多文化共生へのヒントをたくさん得た気がします。今後、慣れない場所で不安に思っている外国の方たちが何をしたいのか考え、特別だと気負わず気軽に自分ができることをすること、決して自己満足で終わらないこと等、日本に住んでおられる外国人の方々に何かしらの形で還元していきたいと思います。また、学校の生徒たちとも、国際理解や多文化共生について一緒に考えながら、行動に移していけるような力を、教育現場を通じて培っていききたいと思います。

10日間、素敵な場所で研修できたこと、かけがえのない経験をさせていただいたことに深く感謝し、今後もこの派遣事業が継続していくことを祈願します。